

# 道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 25 年度 第 2 号 2013 年 12 月 2 日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構  
栽培水産試験場 調査研究部

## 道南太平洋スケトウダラ資源調査（産卵来遊群分布調査）結果

函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2013 年 11 月 19～24 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～500mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を上回った
- ・ 魚群反応は胆振沖（白老～苫小牧沖）が中心
- ・ 反応の比較的強かった海域は、渡島沖では水深 400～500m、胆振沖では水深 350～400mに形成されていたが、海底よりも浮いた反応が主体となっており、海底に着いた反応は渡島沖の 300～350m付近
- ・ 漁獲物の体長（尾叉長）は、40～45cmの成魚の他、20～25cmの未成魚も多かった

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて広い範囲で観察されました。その中でも、胆振海域の 179、182 海区に濃密な反応がみられました（図 1・2）。
2. 海域平均の反応量は、1 次調査（8 月下旬）を大幅に上回りました。また、昨年同期も上回り、金星丸でこの調査を開始した 2001 年度以降では 2009、2007 年度に次ぎ 3 番目に高い値となりました（図 3）。
3. 魚群反応は、渡島沖では水深 300m以深、胆振沖では 250m以深に観察されましたが、魚群反応の強かった海域は、渡島沖では水深 400～500m、胆振沖では水深 350～400m に形成されており、昨年同期よりもやや深くなっていました（図 4）。また、魚群が海底に着いた反応は、渡島沖では水深 300～350m付近にみられましたが、胆振沖では調査したほとんどのラインで海底よりも浮いた反応（250～300m層）となっていました（図 2）。
4. トロール調査の結果、渡島沖（南茅部沖）の水深 350m 付近の漁獲物は、体長（尾叉長）40～45cm のスケトウダラ成魚および同 20～25cm の未成魚となっていました。また、胆振沖（苫小牧沖）の水深 300m付近の漁獲物も体長 40～45cm の成魚および同 10～15cm と同 20cm 前後の未成魚となっていました（図 5）。
5. 調査海域の水温（胆振沖）は、スケトウダラの分布している水深 250m 以深ではほぼ昨年並みとなっていました（図 6）。

以上の結果から、今後の魚群の来遊量は昨年並みかそれ以上になると予想されますが、魚群の分布深度が昨年同期よりも深く、また、海底から離れて浮いている魚群も多いことから、とくに刺し網漁業においては網に掛かりにくい状況となり、思ったほど漁獲量が伸びない可能性も考えられます。

なお、今回の調査は年明け後の 1 月中旬（2014 年 1 月 14～20 日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

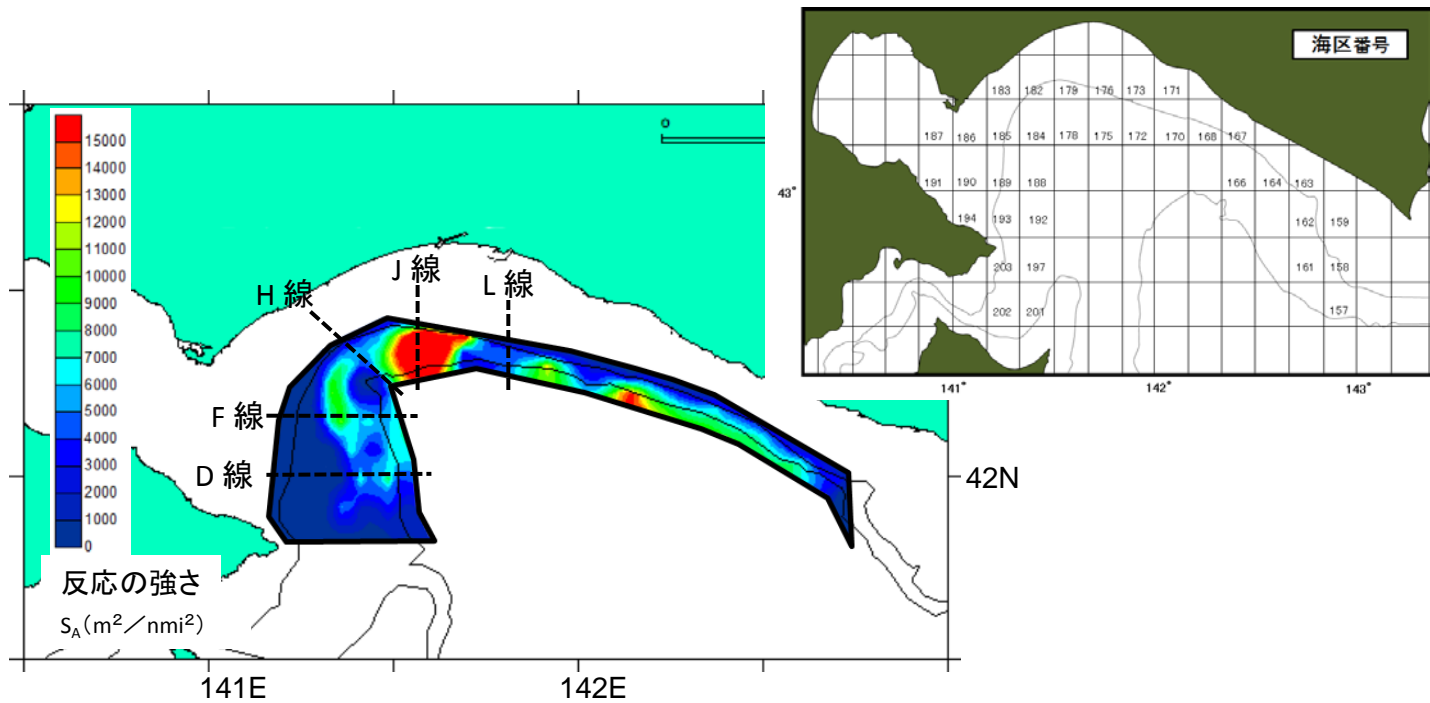


図1 調査海域における魚群の分布

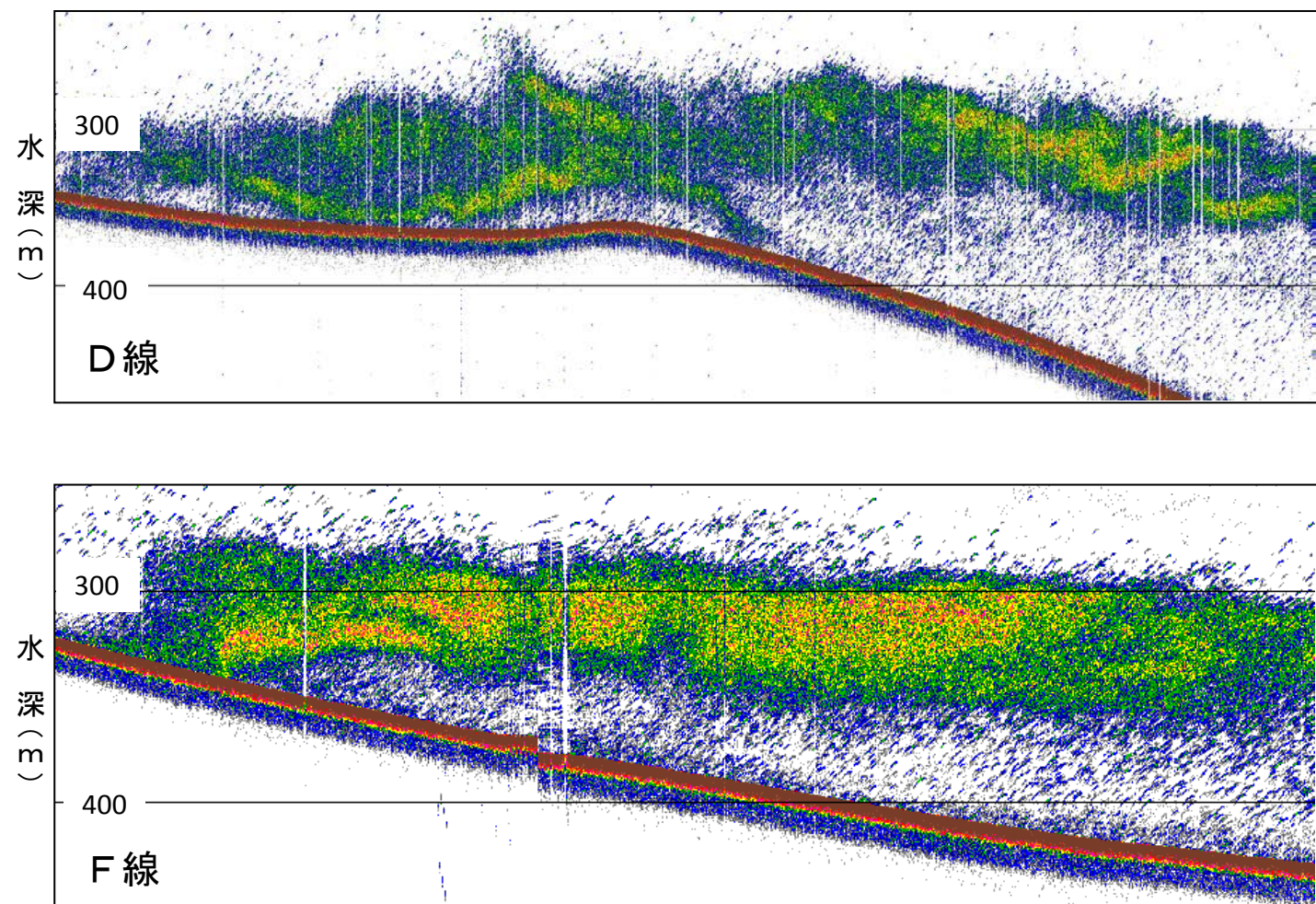


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)



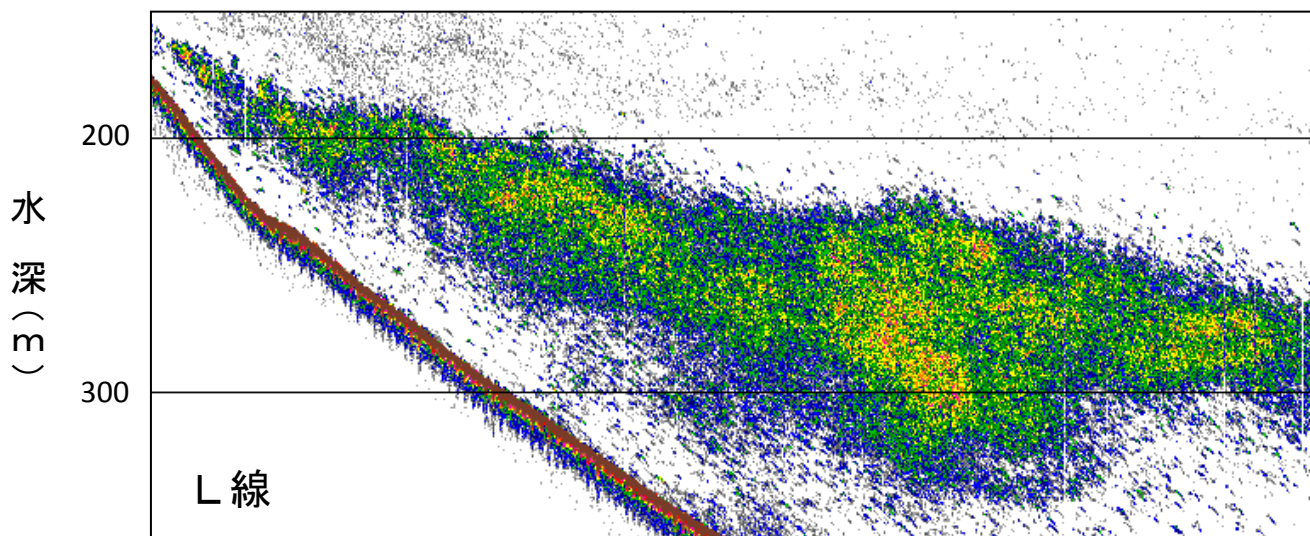
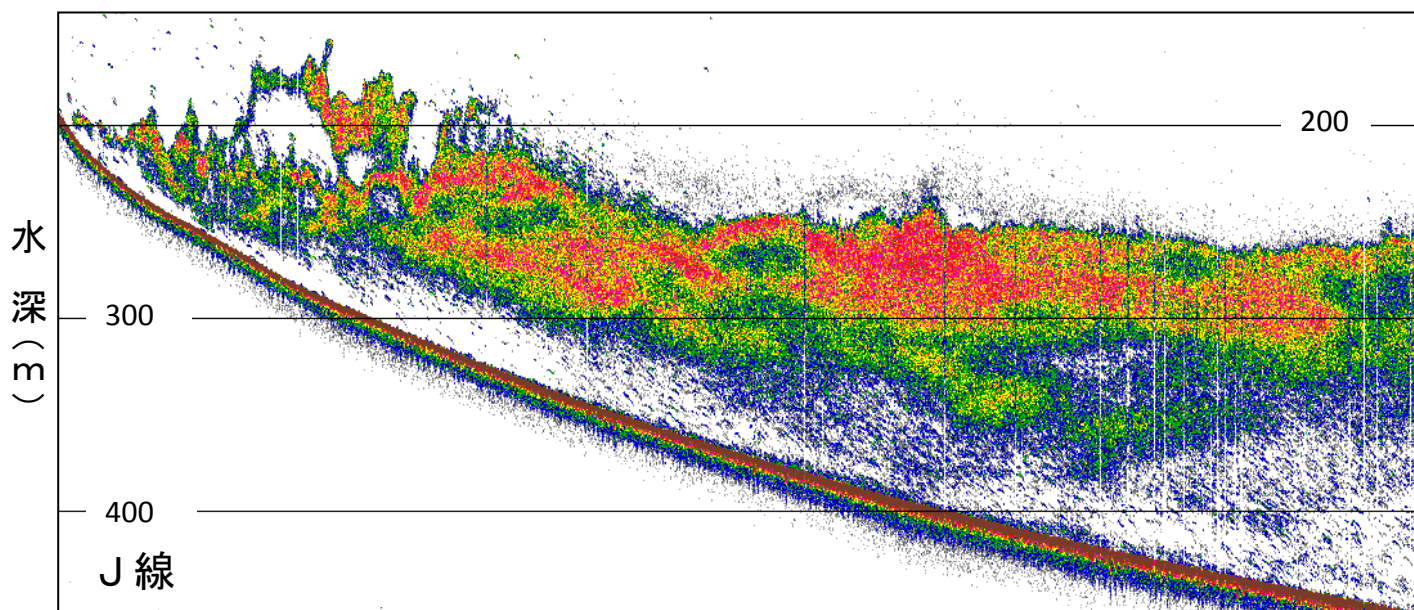
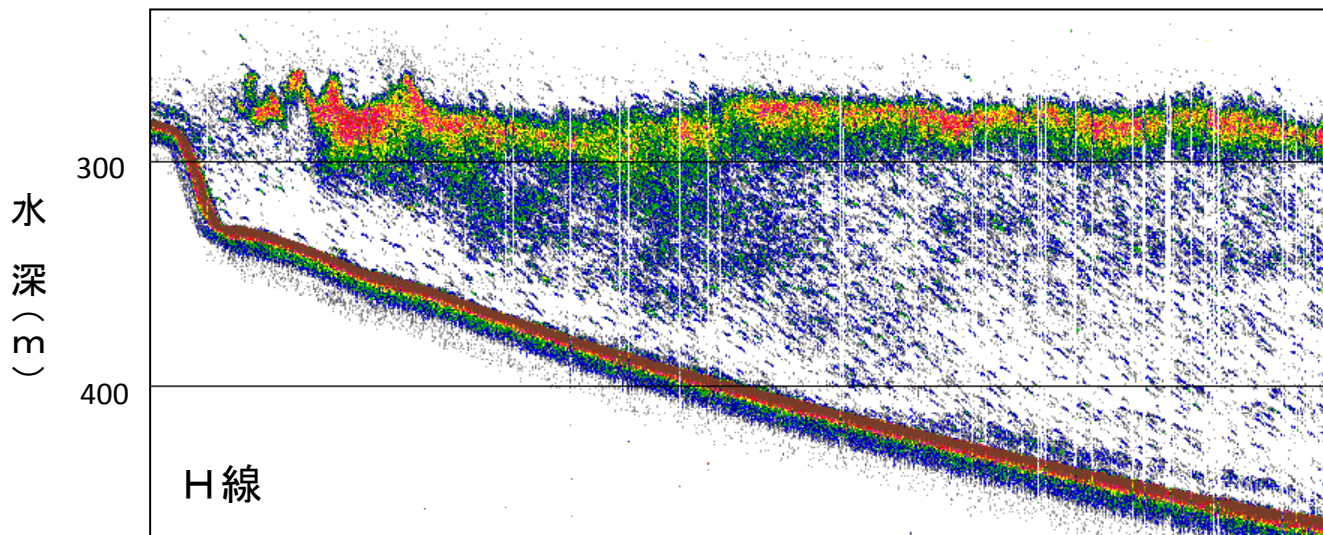


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

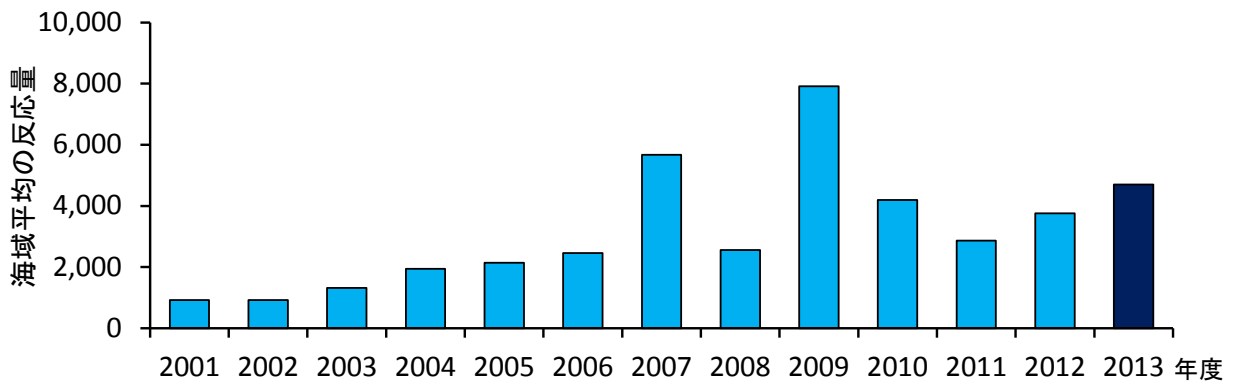


図3 海域平均の魚探反応量 (S<sub>A</sub>) の推移

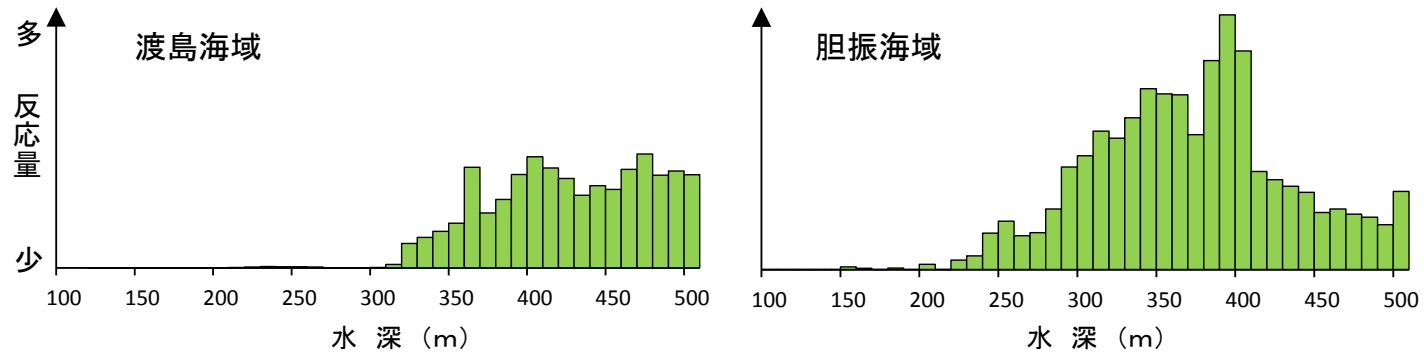


図4 水深別の魚探反応量

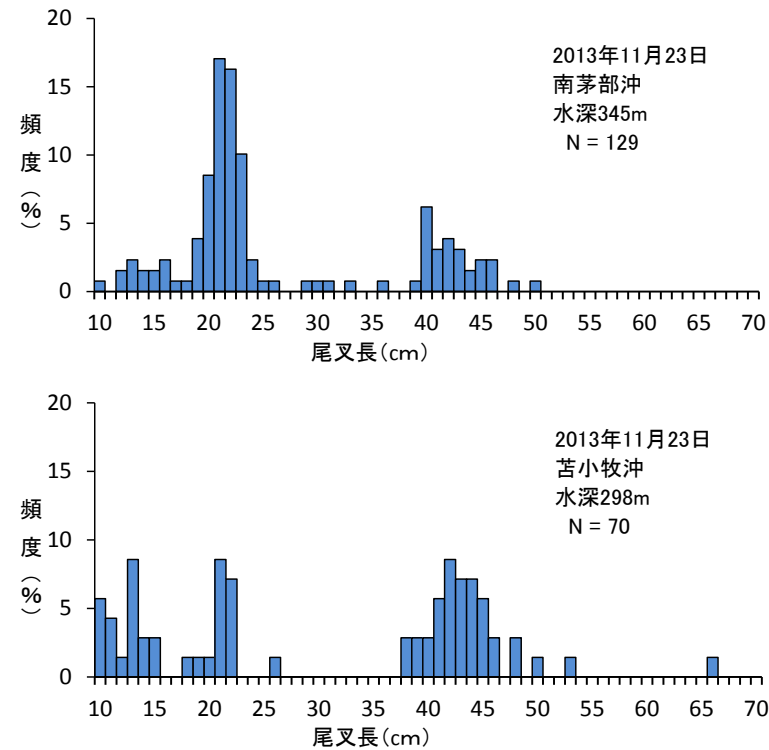


図5 漁獲物の体長組成

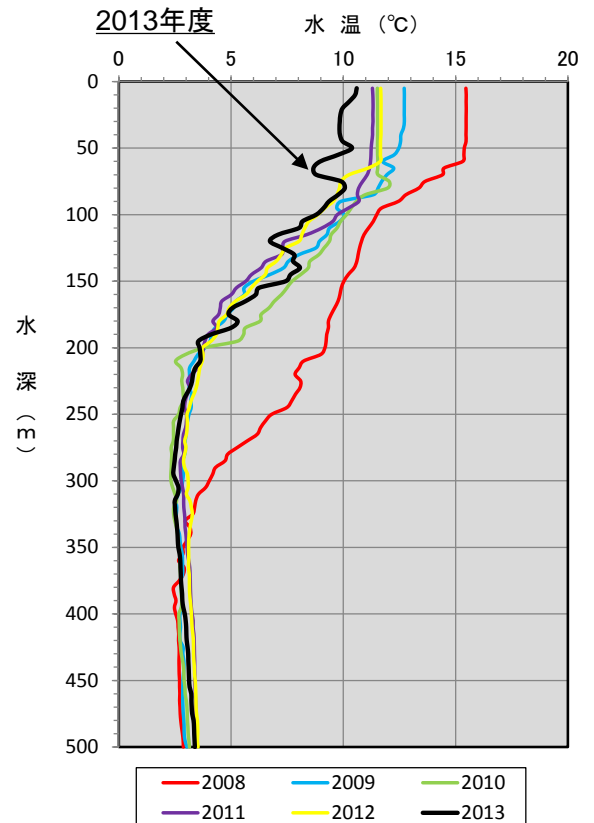


図6 水温の鉛直分布 (登別沖)